



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	公共的記憶に内在する格差とその克服に関する研究 : 戦後ドイツにおける2つの「警鐘碑論争」の場合 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	千葉, 美千子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	乙第7201号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91939
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Chiba_Michiko_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア） 氏名：千葉 美千子

審査委員	主査	特任教授	鈴木 純一
	副査	教授	西村 龍一
	副査	准教授	齋藤 拓也

学位論文題名

公共的記憶に内在する格差とその克服に関する研究

—戦後ドイツにおける2つの「警鐘碑論争」の場合—

本研究の目的は、戦後ドイツにおける二つの「警鐘碑論争（1989－2005、及び2005－2012）」を事例として、公共的な記憶に内在する格差の現状と原因、そしてその克服のプロセスを明らかにすることにある。構成としては、まず格差の実態と歴史的経緯・事実を確認し、次いで格差が生まれ構造化されていった要因を探り、さらにそれが「警鐘碑論争」を契機に社会的問題化することによって、一定の克服プロセスを辿ったことを検証するといった展開となっている。結論として、「想起の多様性を志向する文化」と「了解志向のコミュニケーションとしての公共性」という組み合わせを通して「個別的記憶の複数化・特殊化」と「社会的認識の一般化・統一化」の相互作用が活性化し、構造化された記憶と認識の格差が一定程度克服されるプロセスが明らかにされている。研究方法としては、資料と文献に基づく歴史的な考察が中心となっているが、社会学理論、コミュニケーション理論およびメディア研究の成果も取り入れられている。

審査の過程でまず評価された点は、日本語、ドイツ語、英語にわたる数多くの一次資料、二次資料を丁寧に調査し、丹念に読み込むことで歴史的経緯・事実の信頼性の高い再構成を試みていることである。このことは論の中心となる二つの「警鐘碑論争」に関する資料のみならず、戦後ドイツの歴史や論争史、ユダヤ人やシンティ・ロマの歴史的背景、関係するミュージアムの文献、当事者や関係者の証言等多方面に及び、これらの記述のみでも本論文は資料的価値として十分に評価される水準にある。さらに、このことと関連するが、本論文は「警鐘碑論

争」を多角的かつ立体的に再構成し、その意義を正当に評価するために十分な広がりのある検証を行っている。このことは、例えば、アメリカのホロコースト記念博物館の政治的背景や、ロマの画家によって描かれた絵画の所有権の問題等の詳細かつ複眼的な分析から読み取ることができる。また、理論的なフレームとして「記憶・想起」と「公共的コミュニケーション」という観点を一貫して維持した点も評価できる。この横軸に「個別性・特殊性と一般性・統一性」という縦軸を絡ませることで、明快な論理展開が可能になっており、いたずらに複雑な記述となる危険性を回避している。この展開から「警鐘碑論争」を契機としてドイツで社会問題化した「公共的記憶の格差」が一定程度解消へ向かったという考察は、十分な説得力を持つものである。他方、この結論を早急に一般性・汎用性のあるプロセスと結論づけることはせず、慎重に個別的な条件と限界を指摘している点も評価された。反面、扱う素材が多面化した分だけ、全体として見れば記述がやや散漫な印象を与えるが、これはそれぞれの要素が持つ個別の問題性と正面から取り組んだ結果とも考えられ、肯定的な側面と捉えることもできる。

口頭試問による審査は、令和6年1月15日16時30分から本学院307教室で行われた。冒頭、論文の趣旨、内容に関する説明が執筆者によってなされた後、質疑応答へと移行した。最初に論文全体の構成、基本となる視点や扱われている理論の特質に関して質問がなされ、筆者から論旨を整理しつつ明快な回答があった。さらに、「記憶・想起と公共的コミュニケーション」「個別性・特殊性と一般性・統一性」の関係性に対する説明が求められたが、筆者は従来の研究を継承した部分と独自に解釈した部分を慎重に分けながら両者の組み合わせを的確に説明した。特にアスマンとハーバーマスの理論の導入の必然性に関しては、現代多文化社会におけるメディア的公共性の観点から説得力のある回答がなされた。また本研究の学問的な位置づけ、独創性についての質問もあったが、執筆者は先行研究との違いや歴史学的方法論、さらに社会学理論やメディア研究の成果の援用の意義を説明し整合的回答をおこなった。他にも、「記念碑と警鐘碑」等の訳語の妥当性、「化学反応」や「胆力」等比喩的ことばの実質的意味、言い換え可能性についてのコメントと疑義が出されたが、筆者は論旨に沿って一つ一つ着実かつ丁寧に一貫性をもって回答した。

以上のような本論文への評価および口頭試問を総合的に考えれば、本論文は博士学位論文として十分な水準にあり、審査の結果、審査員全員一致で合格と判断した。